

# 埼玉の遺跡

## 水とともに

第4回埼玉地区文化財担当者会巡回展

宮代町逆井遺跡出土細石核（旧石器時代）

埼玉県東部に位置する埼玉地域の代表的な遺跡を紹介し、考古学の見地から河川の移動や地形の変遷についても考えます。

白岡町タラ山遺跡出土縄文土器（縄文時代）

吉川市西念法師塔（中世）

八潮市弘安7年阿弥陀三尊種子板碑（中世）

春日部市貝の内遺跡出土下総国分寺瓦（奈良時代）

越谷市大道第二遺跡発掘調査風景

### 宮代町郷土資料館

平成21年 1月10日（土）～4月19日（日）  
宮代町字西原 289 TEL: 0480-34-8882 9時30分～16時30分  
休館日：月曜日（1月12日は開館）、1月13日、2月12日、3月24日

### 八潮市立資料館

平成21年 5月1日（金）～5月30日（土）  
八潮市大字南後谷 763-50 TEL: 048-997-6666  
9時～17時 休館日：5月7・11・18・25日

### 春日部市郷土資料館

平成21年 6月13日（土）～7月5日（日）  
春日部市粕壁東 3-2-15 春日部市教育センター内 TEL: 048-763-2455  
9時～16時45分 休館日：6月15・22・29日

### 吉川市中央公民館ロビー

平成21年 7月22日（水）～7月28日（火）  
吉川市大字保 577 TEL: 048-984-3563（生涯学習課）  
8時30分～21時 休館日：なし

### 白岡町役場町民ラウンジ

平成21年 8月11日（火）～8月21日（金）  
白岡町大字千駄野 432 TEL: 0480-92-1111 内線 273・274（生涯学習課）  
8時30分～17時15分 休館日：8月15・16日

### 越谷市大間野町旧中村家住宅

平成21年 9月26日（土）～10月2日（金）  
越谷市大間野町 1-100-4 TEL: 048-985-9750（中村家）048-963-9315（生涯学習課）  
9時～16時30分 休館日：9月28日

埼玉地区文化財担当者会

各会場の案内等については、各市町にお問合せください。  
※展示内容は会場によって異なります。



春日部市貝の内遺跡出土下総国分寺瓦（奈良時代）

蓮田市天神前遺跡出土縄文土器（縄文時代）

栗橋町小草原中世墓地出土瀬戸瓶（中世）

春日部市塚内4号墳出土円筒埴輪（古墳時代）

「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」から転載（撮影年：平成2年度、撮影地区：春日部、整理番号：CKT-90-2、写真番号：C8A-14）

第4回埼葛地区文化財担当者会巡回展

# 埼葛の遺跡 水とともに

埼葛地区文化財担当者会

## 目次

ごあいさつ	・・・・・・・・	1
埼玉地域とは？	・・・・・・・・	2
埼玉のあけぼの ー旧石器時代～縄文時代早期ー	・・・・・・・・	4
海のもたらした恵み ー縄文時代前期ー	・・・・・・・・	7
去りゆく海、低地への第一歩 ー縄文時代後期・晩期ー	・・・・・・・・	10
低地利用のはじまり ー弥生時代～古墳時代前期ー	・・・・・・・・	12
川と低地利用の広がり ー古墳時代中期・後期ー	・・・・・・・・	14
川との共存、そして活用 ー奈良・平安時代ー	・・・・・・・・	16
川との発展 ー鎌倉～戦国時代ー	・・・・・・・・	20
石造物からみた低地の利用 ー鎌倉～戦国時代ー	・・・・・・・・	23
遺跡からみた河川のうつりかわり	・・・・・・・・	24

1. 本書は埼玉地区文化財担当協会が開催する第4回巡回展「埼玉の遺跡 水とともに」の展示解説です。さらに詳しくお知りになりたい方は、埼玉地区文化財担当協会報告書第6集『埼玉の遺跡』をご覧ください。
2. 展示の企画及び本書の執筆は埼玉地区文化財担当協会考古部会が行いました。  
埼玉地区文化財担当協会考古部会  
部会長：松崎慶喜（白岡町）  
部会員：越智俊夫、鬼塚知典（春日部市）、末次雄一郎（松伏町）、池尻 篤（鷲宮町）

## ごあいさつ

このたび、埼玉葛地区文化財担当者会では、巡回展『埼玉葛の遺跡 水とともに』を開催する運びとなりました。

本巡回展は、平成19年度に当会で刊行した報告書『埼玉葛の遺跡』をもとに構成したものです。報告書では、埼玉葛地域における旧石器時代から中世までの遺跡や石造物等の基礎データを集成いたしました。その中で、人々の低地への進出や、自然堤防上の遺跡の時代からみた河川の流路変遷などについて考察しております。その結果、台地上を横切る旧利根川流路の存在、土器や石器石材などにみえる周辺地域との交易の実態といった本地域における特徴が如実に浮かび上がってまいりました。

本会は発足して20年来、埼玉葛地域の歴史や文化について、行政区域にとらわれない横断的・総合的な調査研究を行ってまいりました。同時にその成果を地域の方々へ還元すべく、今回のように報告書の刊行や巡回展の開催を行っております。本巡回展も、ご覧いただいた皆様の地域の歴史・文化へのご理解の一助となれば幸いに存じます。

平成20年3月

埼玉葛地区文化財担当者会  
会長 田中 和之

## ●埼玉地域とは？

### (1)「埼玉」の名称の由来

埼玉地域とは、埼玉県の東部に位置している南埼玉郡市の鷺宮町の一部・菫蒲町・久喜市・白岡町・蓮田市・宮代町・春日部市の一部・旧岩槻市・越谷市・八潮市、北葛飾郡市の栗橋町・鷺宮町の一部・幸手市・杉戸町・春日部市の一部・旧庄和町・松伏町・吉川市・三郷市の計17市町から構成されてきました。このうち、旧岩槻市は平成17年4月にさいたま市と合併してさいたま市岩槻区となり、春日部市と旧庄和町は平成17年10月に合併して新たな春日部市となり、現在では15市町から構成された地域となっています。

現在の埼玉地域は、南埼玉郡と北葛飾郡に属していた市町から構成されているため、各郡名の頭文字を取ってこの名称が使われています。これらの郡名は明治11年に旧来の郡を復活させることを目的とした「郡区町村編成法」の公布に遡ることができ、それでは「旧来の郡」とは、いつの時代に遡る名称なのでしょう。大化元(645)年以降の政治的、経済的な改革が「大化の改新」と呼ばれていることは周知のとおりで、その基本方針として大化2(646)年正月に「改新之詔」が公布されました。その中で、国郡(評)里制といった地方行政機構についての項目があり、現在の都道府県や市町村に相当する機構が成立したことが窺えます。その後、天武13(684)年12月に諸国の境界が確定し、それと共に郡界の設定や里の設置が行われました。そして、大宝元(701)年には「大宝律令」が制定され、本格的な律令時代の到来となりました。このような流れの中で、現在の埼玉地域の周辺では、旧利根川筋(概ね現在の古利根川)を国境として、西側に武蔵国埼玉郡が、東側に下総国葛飾郡が、それぞれ設置されました。その後、中世以降に郡名は形骸化してしまうものの、近世には国郡村制によって郡の名称が復活し、近代に入って先に示した法律の公布によって、古代の郡名が法的に復活したのです。すなわち、「埼玉」の名称の由来は、今から1,300年以上も前に遡るものであり、かつて埼玉地域は武蔵国と下総国という2国に跨って立地していたことがわかります。



## (2) 埼玉地域の地理的環境

埼玉地域は埼玉県東部に位置し、北端で茨城県、東端で千葉県、南端で東京都と接しています。本地域は、旧岩槻市も含めると面積 486.17 k m<sup>2</sup>の規模を測り、140 万人近い人口を数えます。

本地域の現在の地形は、南北に長い中川低地を挟んで西側に大宮台地、東側に下総台地が存在しています。台地を概観すると、大宮台地は蓮田・岩槻支台、白岡支台、慈恩寺支台等が各々独立丘として存在しており、大宮台地は関東造盆地運動の影響で北部に向かうほど低くなり、低地に埋没する「埋没台地」となっています。下総台地では、江戸時代初頭に開削された江戸川によって千葉県側の下総台地本体から切り離されており、台地の西端部である宝珠花支台、金杉支台が本地域に存在しています。

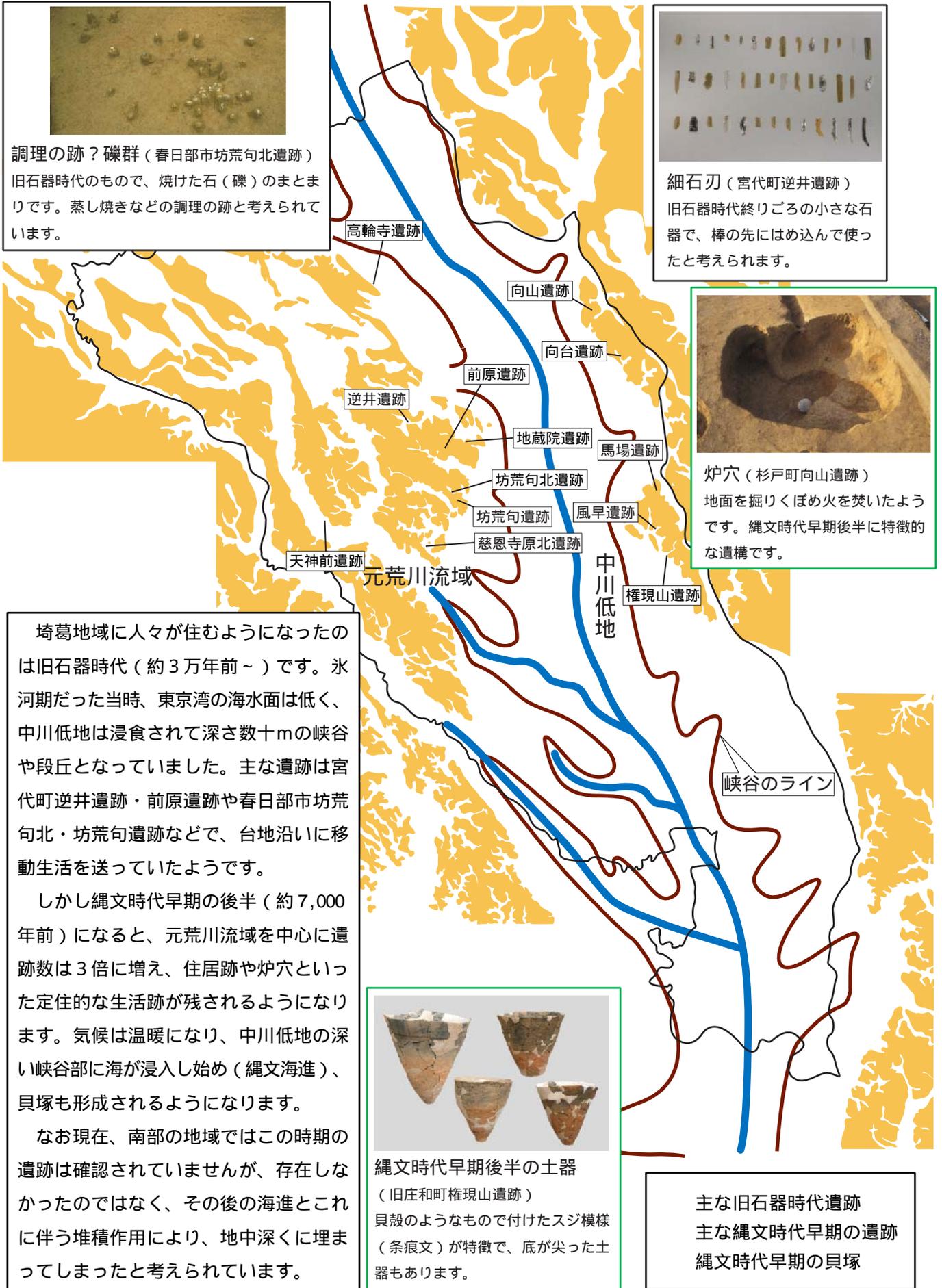
一方、中川低地等の本地域周辺の低地は、河川による堆積物によって形成された地形です。ただし、低地の中にも自然堤防や河畔砂丘等、周辺よりも一段高い地形が存在しています。自然堤防とは洪水等の際、河川の沿岸に土砂が堆積してできた堤防状の高まりを指します。河川の廃川後も地形として残るために、自然堤防の存在によって、現在では河川がない場所でもかつて河川が流れていたことを確認することもできます。また河畔砂丘とは、川原の砂が風によって流され、積みあがって砂丘となった地形です。関東地方の河畔砂丘は、冬の北西からの季節風によって形成されるので、河川流路の南東に形成されています。

本地域の現在の河川は、北端では利根川、東端では江戸川、西端では綾瀬川・元荒川が流れており、古利根川・中川が地域中央の中川低地を流れています。元荒川と綾瀬川は台地の谷筋から最終的に中川低地へと流れ出し、最終的に古利根川や中川とも合流して大河川となっています。低地を流れるこれらの河川の両岸には自然堤防が発達し、また地域全域にわたって、部分的に残存している河畔砂丘が多くに見られることも特徴です。



# 埼玉のあけぼの

- 旧石器時代～縄文時代早期 -



調理の跡？礫群（春日部市坊荒句北遺跡）  
旧石器時代のもので、焼けた石（礫）のまとまりです。蒸し焼きなどの調理の跡と考えられています。



細石刃（宮代町逆井遺跡）  
旧石器時代終りごろの小さな石器で、棒の先にはめ込んで使ったと考えられます。



炉穴（杉戸町向山遺跡）  
地面を掘りくぼめ火を焚いたようです。縄文時代早期後半に特徴的な遺構です。

埼玉地域に人々が住むようになったのは旧石器時代（約3万年前～）です。氷河期だった当時、東京湾の海水面は低く、中川低地は浸食されて深さ数十mの峡谷や段丘となっていました。主な遺跡は宮代町逆井遺跡・前原遺跡や春日部市坊荒句北・坊荒句遺跡などで、台地沿いに移動生活を送っていたようです。

しかし縄文時代早期の後半（約7,000年前）になると、元荒川流域を中心に遺跡数は3倍に増え、住居跡や炉穴といった定住的な生活跡が残されるようになります。気候は温暖になり、中川低地の深い峡谷部に海が浸入し始め（縄文海進）、貝塚も形成されるようになります。

なお現在、南部の地域ではこの時期の遺跡は確認されていませんが、存在しなかったのではなく、その後の海進とこれに伴う堆積作用により、地中深くに埋まってしまったと考えられています。



縄文時代早期後半の土器  
（旧庄和町権現山遺跡）  
貝殻のようなもので付けたスジ模様（条痕文）が特徴で、底が尖った土器もあります。

主な旧石器時代遺跡  
主な縄文時代早期の遺跡  
縄文時代早期の貝塚

## ● 埼玉のあけぼの —旧石器時代～縄文時代早期—

### (1) 旧石器時代（約3万年前～1万4千年前）

人々が初めて埼玉地域に足跡を残すのは、旧石器時代のことです。氷河期の終わりごろであった当時、気候は寒冷で、地球上の水分は雪や氷となって陸上にとどめられていました。関東地方では、東京湾の海水面が現在よりも100m以上低いところにあり、浦賀水道あたりが海岸線でした。当然それに注ぐ河川（「古東京川」といわれる）も急流となり、埼玉地域の台地は河川に浸食されて切り立った峡谷になっていました。今の中川低地にいたっては深さ数十mもの深い谷だったと考えられています。また、富士山・箱根山・浅間山などの火山活動も活発で、大量の火山灰が日々降り注いでいました。

この時代は、のちの縄文時代のように土器を作ることはまだ知られておらず、「石器」が生活を知るための重要な手がかりとなります。住居跡なども見つかることはまれで、獲物を追って移動する生活を送っていたようです。

この時期の遺跡は51遺跡確認され、大宮台地側で43遺跡、下総台地側で8遺跡を数えます。いずれも台地の縁辺部のような、安定した地形でかつ狩り（狩猟）に便利な場所に存在します。

ほとんどの遺跡で出土しているのが、狩りのための石器です。「ナイフ形石器」はその代表例で、「ナイフ形」といっても刃物としてだけでなく、槍先としても用いられたと考えられています。これとは別に、槍先専用の「尖頭器」という石器が出土する遺跡もみられます。

宮代町逆井遺跡、旧庄和町風早遺跡は、細石刃という小さな石器が出土している珍しい例です。細石刃は一つ一つが小さな刃のようになっており、木の柄などに複数はめこんで用いたようです。逆井遺跡は発掘された状況から、細石刃の“製作工房”ではないかと考えられています。

これら狩りのための石器には黒曜石・頁岩・圭質岩など、鋭く割れる性質の石材が用いられています。旧石器時代の人々が石器にする石を選んでいたのでしょう。

狩り以外の道具はどうなのでしょう。前に述べた旧庄和町風早遺跡では「局部磨製石斧」という、刃の部分だけを磨いた斧状の石器が出土しています。この石斧は細石刃などよりも古い地層から出土しています。

道具ではない石が出土することもあります。春日部市坊荒句北遺跡・慈恩寺原北遺跡では、焼けた石ころの集中＝「礫群」が確認されました。礫群は蒸し焼きなど調理の跡と考えられ、その日の獲物に舌鼓を打つ狩人たちの様子が目に浮ぶようです。

ところで現在、埼玉地域では石が採れるような場所は見当たりません。旧石器時代の人々はどこから石を採ってきたのでしょうか。

石器の石材を調べたところ、黒曜石は栃木県の高原山産の、頁岩は東北地方産のものが多く使われていることがわかりました。坊荒句北遺跡の礫群は、現在の渡良瀬川流域の河原の礫とほぼ同じ構成でした。中川低地は上流で渡良瀬川につながり、また中川低地の谷底そのものも石の河原だったことがわかっています。これらのことから、石材の入手には川をさかのぼって産地へ採りに行ったり、中間地点でその地域の人々から入手したり、あるいは眼下の河原から採取したりといったいくつかの可能性が考えられます。いずれにしても人々が広範囲に移動していたことがうかがえるとともに、石材の調達の間や移動のルートとして「川」（谷）が果たしていた役割にも注目しておくべきでしょう。



局部磨製石斧（旧庄和町風早遺跡）

注意したいのは、「見つかっていない遺跡」の存在です。埼玉地域の峡谷は、その後縄文時代前期にかけて、急激な温暖化による「縄文海進」のため、砂泥などの堆積物に埋まってしまう。しかし現在の台地縁辺の地下 20m 付近（越谷市から八潮市にかけての中川流域南部の低地域）には、埋まってしまった台地（段丘面）があることが知られています（図の「峡谷のライン」縁辺）。これらの埋没した段丘面にも遺跡が存在した可能性があり、埼玉地域南部の旧石器時代から縄文時代早期の遺跡は、地下深くにあって発見が困難なだけとみるべきなのです。

(2) 縄文時代草創期～早期（約 1 万 4 千年～6,000 年前）

縄文時代は、狩猟採集という旧石器時代からの生活様式を引き継ぎながらも、土器の発明という大きな技術革新によって生産力を向上することができた時代です。学術的には草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と 6 時期に分けられますが、実は草創期から早期にかけての時期が縄文時代のほぼ半分を占めています。

まず草創期（約 14,000 年前～10,000 年前）ですが、全国的にも遺跡数が少ない時期で、埼玉地域でも大宮台地側で 30 遺跡、下総台地側で 6 遺跡にすぎません。その中で大宮台地側では宮代町前原遺跡、春日部市竹之下遺跡・坊荒句北遺跡・坊荒句遺跡など、旧石器時代から引き継ぐように慈恩寺支台中～南部に集中します。下総台地側では杉戸町木津内貝塚、鷲巣前原遺跡、松伏町本郷遺跡が挙げられます。遺構は確認されませんが、宮代町前原遺跡では土器（隆起線文土器・表裏縄文土器）が出土しており、埼玉地域唯一の貴重な資料です。ほかの遺跡でも、有舌尖頭器（※1）とよばれるこの時期特有の石器が出土しています。

※1 旧石器時代以来の槍先（尖頭器）に比べ、やや小型で中茎（装着する柄）を有する石器。

続く早期（約 10,000 年前～6,000 年前）は、気候が急速に温暖化し、海面の上昇により内陸部へ海が入り始めます。植物相も針葉樹林から落葉広葉樹林へ、動物相もナウマンゾウ・オオツノジカなど大形獣からシカ・イノシシなど小形獣へと変化し、土器や石器など人間の生活様式にも影響したと考えられています。遺跡数は大宮台地側で 199 遺跡、下総台地側で 36 遺跡と大幅に増加します。

まず早期初めごろの「撚糸文系土器期」（※2）では、宮代町前原遺跡や春日部市坊荒句遺跡などで初めてまとまった集落が営まれます。これらの遺跡では 10 軒前後の住居跡が見つかっており、旧石器時代や縄文時代草創期に比べ、土地への定着性が高まったのでしょう。茨城県や東京湾周辺では貝塚も形成されるので、狩猟だけでなく漁労活動も活発になり始めたことがうかがえます。

続く早期中ごろの「沈線文土器期」は一転して全国的に遺跡数が減少しますが、埼玉地域では近年確認例が増加しつつあります。前述の坊荒句遺跡や春日部市塚内 14



尖頭器(左) (久喜市道合中遺跡・高輪寺遺跡)



尖頭器(中)・有舌尖頭器(右) (蓮田市宿裏遺跡)



撚糸文系土器期の住居跡（春日部市坊荒句遺跡）



撚糸文系土器（春日部市坊荒句北遺跡）

号墳、宮代町<sup>かねはら</sup>金原遺跡では住居跡や形態のわかる土器が出土しています。

早期でも終盤の「条痕文土器期」は、これまででない爆発的な遺跡数の増加をみます。しかもこれまで分布の希薄だった菖蒲町、久喜市などの河川流域奥部や台地内部まで遺跡が展開します。

埼玉葛地域の人々は、大きな環境の変化に気付いたようです。いつのころからか、「中川峡谷」に潮騒がこだまするようになり、そこで得られる食糧資源も見逃しませんでした。

蓮田市<sup>てんじんまえ</sup>天神前遺跡・春日部市坊荒句北遺跡、杉戸町<sup>むこうだい</sup>向台遺跡では、「炉穴」<sup>ろあな</sup>(=屋外の煮炊き跡)からハイガイ・マガキなどの貝層が確認され、埼玉葛地域でもっとも古い例です。これらの貝は干潟や浅海の泥底にすみ、とくにハイガイは現在三河湾以南で見られる貝であることから、いかに当時の気候が温暖であったかや、「中川峡谷」が海や川の影響で埋まり始めていたことを示しています。海産資源の利用拡大は生産性を向上させ、遺跡数の増加につながったものと思われま

※2) 縄文時代は、早期に限らず土器の模様などの特徴をとらえて時間のものさしとしています。これを「土器編年」<sup>どきへんねん</sup>といいます。



条痕文系土器（白岡町タタラ山遺跡）



貝層をもつ炉穴（春日部市坊荒句北遺跡）

## ●海がもたらした恵み ー縄文時代前期・中期ー

縄文時代前期（約 6,000～5,000 年前）になると、縄文海進による海岸線の前進はピークを迎えます。もっとも奥部では栃木県藤岡町付近に達したといわれています。これに呼応するかのよう

に、埼玉葛地域の遺跡数は増加し、大宮台地で 233 遺跡、下総台地側では早期の倍の 73 遺跡に達します。遺跡の立地も、主要河川谷に面した台地縁辺部での増加が目立ちます。何よりも特筆されるのは、貝塚が縄文全時期を通じて最多となることです。大宮台地では 43 ヶ所、下総台地では 23 ヶ所確認され、とくに下総台地では遺跡数に占める貝塚数が突出して多くなっています。パネル図からは、大宮台地南部と下総台地のほぼ全域に分布することがわかります。県内でも有数の貝塚の密度は、広大な海を抱えた埼玉葛地域の特徴そのものといえるでしょう。

詳細時期でみると、前期初めの花積下層式期では早期後半に比べ著しく遺跡数が限られますが、大宮台地（慈恩寺支台）<sup>じおんじ</sup>の先端、春日部市花積貝塚がこの時期に形成され、白岡町タタラ山遺跡では早期ではみられなかった大規模な集落が形成されます。層をなすほどの貝塚の形成は、海岸線がより埼玉葛地域に近づき食糧獲得の幅が広がったことを示しています。またタタラ山遺跡の住居跡には、早期にみられなかった住居内に



花積下層式の住居跡（白岡町タタラ山遺跡）



住居内の埋設土器（白岡町タタラ山遺跡）

炉を持つものが現れることから、定住性の高まりもうかがえます。花積下層式期は集落の発展形態において一つの画期といえるでしょう。なお貝塚の貝種は、花積貝塚・旧岩槻市南貝塚でハイガイ・マガキ・ハマグリ主体、下総台地（宝珠花支台）の杉戸町宮前遺跡でもハマグリ主体となっています。

続く関山式期は、大宮台地では元荒川・綾瀬川流域で遺跡が増加し、大宮台地では綾瀬川流域の関山貝塚

# 海がもたらした恵み - 縄文時代前期 -



縄文時代前期(約6,000~5,000年前)、縄文海進がピークを迎え、中川低地は内陸まで遠浅の海となりました(奥東京湾)。海は次の中期(約5,000~4,000年前)には一度退いてしましますが、遺跡数は前期から中期にかけて、200~350遺跡と最も多くなります。潮が引くと集落のふもとに広大な干潟が現れ、魚や貝など豊富な海の幸を安定的に手に入れることができたためでしょう。

海の恩恵を示す痕跡が貝塚です。蓮田市関山貝塚・黒浜貝塚群や春日部市花積貝塚など考古学史上でも有名な貝塚のほか、杉戸町木津内貝塚、旧庄和町犬塚遺跡などがその代表例です。貝塚の貝は主にハイガイ・マガキ・アサリ・ハマグリなど干潟や泥底に棲む種ですが、松伏町本郷貝塚では魚や鳥獣、は虫類など多様な動物骨もみられます。



**縄文時代前期の土器**  
 (蓮田市天神前遺跡)  
 天神前遺跡は黒浜貝塚群の一つで、周辺から出土する土器は「黒浜式土器」として土器型式の基準となりました。

縄文時代前期の海  
 (奥東京湾・現中川低地)

発掘された前期の遺跡  
 発掘された前期の貝塚遺跡  
 確認されている前期の貝塚遺跡

(=関山式土器の標式遺跡)、元荒川流域の蓮田市宿下遺跡、下総台地の旧庄和町風早遺跡で集落・貝塚が形成されます。貝塚の貝種も宿下遺跡ではハイガイ主体、風早遺跡でハマグリ主体と花積下層式期に構成が似ています。

前期中ごろの黒浜式期・諸磯 a 式期になると久喜市・鷲宮町など河川奥部まで分布が広がり、遺跡数・貝塚数が前期の最盛期を迎えるとともに、貝塚の規模も最大級となります。

蓮田市宿上遺跡を含む黒浜貝塚群では約 60 軒の住居跡が確認され、拠点的性格の集落として間違いありません。ただし貝塚の貝種はアサリ主体となるなど、関山式期とは変化がみられます。



黒浜式期の住居 (幸手市榎原地原遺跡)

下総台地ではほぼ全てがこの時期の遺跡となり、貝塚の多さから海の恩恵を最大限にあずかったことがうかがえます。主な集落・貝塚は宝珠花支台の杉戸町木津内貝塚・向台遺跡・幸手市榎野地原遺跡、金杉支台の松伏町本郷遺跡・旧庄和町犬塚遺跡など、大宮台地以上に大規模な貝塚がみられます。貝塚の貝はアサリ・ハマグリを主体とするほか、本郷

遺跡ではカツオなどの外洋魚や爬虫類・両生類・鳥類及び哺乳類など、じつに多様な動物骨が含まれていました。海産・陸上を問わず、利用可能な動物は何でも食用にしたことがわかります。



黒浜式土器 (旧庄和町犬塚遺跡)



一面に広がる貝塚 (旧庄和町犬塚遺跡)

ところが、前期後半の諸磯 b 式期になると、遺跡・貝塚とも数や規模は一転して減少・縮小し、末葉の諸磯 c 式期・十三菩提式期に至っては住居跡などの集落的な遺跡はほとんど見られなくなってしまいます。貝塚の貝種も、オオタニシ (旧岩槻市掛貝塚、諸磯 c 式期)・アサリ・オキシジミ (杉戸町木津内貝塚) と、これまでと違い淡水・汽水系の貝になっていくようです。後続する縄文時代中期は海岸線が後退することが知られており、すでにその兆候が始まっていたのでしょう。環境の変化が遺跡数の減少に影響していると考えられます。その一方で、大宮台地の白岡町茶屋遺跡や杉戸町木津内貝塚・旧庄和町作之内遺跡では、東関東系の土器 (浮島式土器・興津式土器) が出土しています。遺跡が減少する中でも、東西関東の情報交流は確実に行われていると考えられます。また、前期の石器の石材に用いられた黒曜石の産地について、信州系と神津島系が半ばするという分析結果が出ています。大海を渡って埼玉地域に黒曜石をもたらす人々がいたことは驚きです。



東関東系の土器 (旧庄和町作之内遺跡)

縄文時代中期 (約 5,000~4,000 年前) になると、海岸線が後退していきます。中期前半には、大宮台地では前期後半に一度減った遺跡数が再び増加しますが、集落遺跡の分布は空疎で、検出される遺構も住居跡 1~2 軒や土坑数基程度と小規模です。下総台地では中期前半の集落遺跡はほとんど見つかりません。

中期後半になると、大宮台地では遺跡数が最大になり、大規模集落の形成も顕著となります。蓮田市宿下遺跡では 60 軒以上の住居跡が検出されています。下総台地では、遺跡数は前期ほどではありませんが中期前半よりも増加します。

# 去りゆく海、低地への第一歩

- 縄文時代後期・晩期 -



縄文時代後期の大型住居  
(白岡町上小笠原遺跡)  
長径が10mを超える非常に大きな住居跡です。



縄文時代晩期の土版  
(菖蒲町地獄田遺跡)  
人の顔のような装飾が施されています。祭祀に使われたのでしょうか。



縄文時代後期の土器  
(松伏町本郷貝塚)  
1ヶ所からまとめて出土しました。食器一式でしょうか。



縄文時代後期(約3,500年前)になると、一度退いた海が再び中川低地へ進出しますが、前期に堆積作用が働き、奥地まで進入しません。後期の貝塚は馬蹄形貝塚、環状貝塚といわれる規模の大きな貝塚が見られるのが特徴で、下総台地側を中心に大規模な貝塚が点在しています。埼玉県東部、千葉県西部に見られる貝塚を見てみると、縄文時代後期の海は下総台地側に寄って存在した可能性が高いと考えられます。この海は確認される貝種から干潟を伴う浅い穏やかな海であったことが想像できます。

晩期(約2,500年前)に入ると埼玉県内の遺跡数は減少しますが、発見されている遺跡を見てみると低地部にも生活の痕跡が残されている遺跡が確認できます。吉川市川藤では縄文時代晩期頃の肥沃地に存在する樹木(オニグルミ)が確認されています。こうしたことから、縄文時代晩期には中川低地から海は退き、人々はその生活の場を求めて低地に進出していった可能性が高いと考えられます。



吉川市川藤で発見されたオニグルミ

主な縄文時代後期、晩期の遺跡  
川にすむ貝の貝塚  
川と海の境にすむ貝の貝塚  
海にすむ貝の貝塚

## ●去りゆく海、低地への第一歩 —縄文時代後期・晩期—

縄文時代後期（今から約3,500年前）になると、一度陸地から離れた海は気温の上昇に伴い再び中川低地へ進出します。文章中では便宜的に縄文時代前期を中心とした海進を「前期海進」、縄文時代後期を中心とした海進を「後期海進」と呼ぶことにします。後期海進時の中川低地の海は、貝塚から確認される貝種から、干潟を伴う浅い穏やかな海であったことが想像できます。しかし、中川低地奥地まで進出した前期海進による土砂の堆積によって、中川低地全体の標高が上がったため、後期海進時には前期海進時ほど海が奥地まで進出しません。縄文時代後期の貝塚が前期ほど北部まで分布しないのはこのためです。1999年刊行『埼玉の縄文前期』によると、前期海進による堆積は、越谷市付近で約40mも堆積しており、中川低地の地形が前期海進によって大きく変わったことが窺えます。

陸地への海の再進出は、縄文人にとって大きな恵みとなったことでしょう。その証拠に縄文時代後期の貝塚は、馬蹄形貝塚（上空から見ると馬の蹄のように貝が分布している貝塚）、環状貝塚（上空から見ると貝が環のように分布している貝塚）と呼ばれる規模の大きな貝塚が目立つことから窺えます。埼玉地域ではこうした貝塚が旧庄和町、松伏町内の下総台地上に点在しています。中には旧庄和町神明貝塚のように長径が100mを越えるものもあります。

貝塚分布に沿って後期海進の海岸線を検証してみましょう。図を見ると、大宮台地上に貝塚は存在するものの、確認される貝種は川と海の境を主に生息場とするヤマトシジミが主体となる貝塚が多いのに対し、下総台地側の貝塚の内、旧庄和町より南の貝塚からは海に生息する貝が多く確認されています。このことから中川低地の後期海進の海岸線は、下総台地に寄って存在した可能性が高いと考えられます。さらに海岸線の最北部を検証してみると、旧庄和町より北で確認される貝塚からは前述のヤマトシジミを主体とする貝塚が目立ち、逆に旧庄和町より南の貝塚からは海に生息する貝が目立ちます。このことから後期海進の最北部は旧庄和町付近の可能性が高いと考えられます。ここでいう「川と海の境」は河口を含めた塩分を含む水域のことを指します。塩分を含む水域の範囲は予想以上に広く、現在の中川に当てはめてみると、河口から30km以上離れた吉川市、松伏町付近でも川の水から塩分を確認できるのです。このことから旧庄和町より北の貝塚で確認されるヤマトシジミは、海に注ぐ川などで採取された貝である可能性も考えられるのです。

しかし、縄文人に大きな恩恵を与えた後期海進も、縄文時代晩期（今から約2,500年前）の終盤には現在の海岸線に近いところまで退いてしまいます（このことを「海退」といいます）。海退後の中川低地には、海によって残された多くの堆積物が残り、湿地が広がっていたことでしょう。そこに台地からの湧水や雨水が川となって流れ、川に沿って洪水や風の作用によって土砂が堆積し、自然堤防が形成され始めたのではないかと考えられます。この時期の資料として吉川市川藤地区では自然堤防下からオニグルミという樹木が発見されました。このことから、縄文時代晩期には自然堤防が形成され始めていたことがわかります。

縄文時代晩期の遺跡数は後期に比べ減少します。しかし、本当に遺跡自体が減少したとはまだ言い切れません。縄文時代晩期の遺跡の中には海退後の低地にも生活の痕跡が残されている遺跡もあるからです。海退後の低地、特に湿地帯より少し標高が高い自然堤防に人々が生活の拠点を移した可能性は十分に考えられます。低地の遺跡はその後の土砂の堆積によって地中深くから発見されることが多く、ただ発見されにくいだけなのかもしれません。実際に弥生時代に入ると自然堤防上の遺跡も確認されています。

埼玉地域にお住まいの皆さんの中には「自分の住んでいるところは、昔海だったから遺跡はない」と言う方も多くいらっしゃいます。しかし、縄文時代晩期以降は低地にも遺跡が存在する可能性は十分に考えられるのです。もしかするとすぐ近くに地中深く眠る原始・古代の大集落があるかもしれませんね。

# 低地利用のはじまり

- 弥生時代～古墳時代前期 -



**鷺宮町粟原出土土器**  
1～5遺跡のある粟原地区からは古墳時代前期の土器が発見されており、遺構存在の可能性がうかがえます。



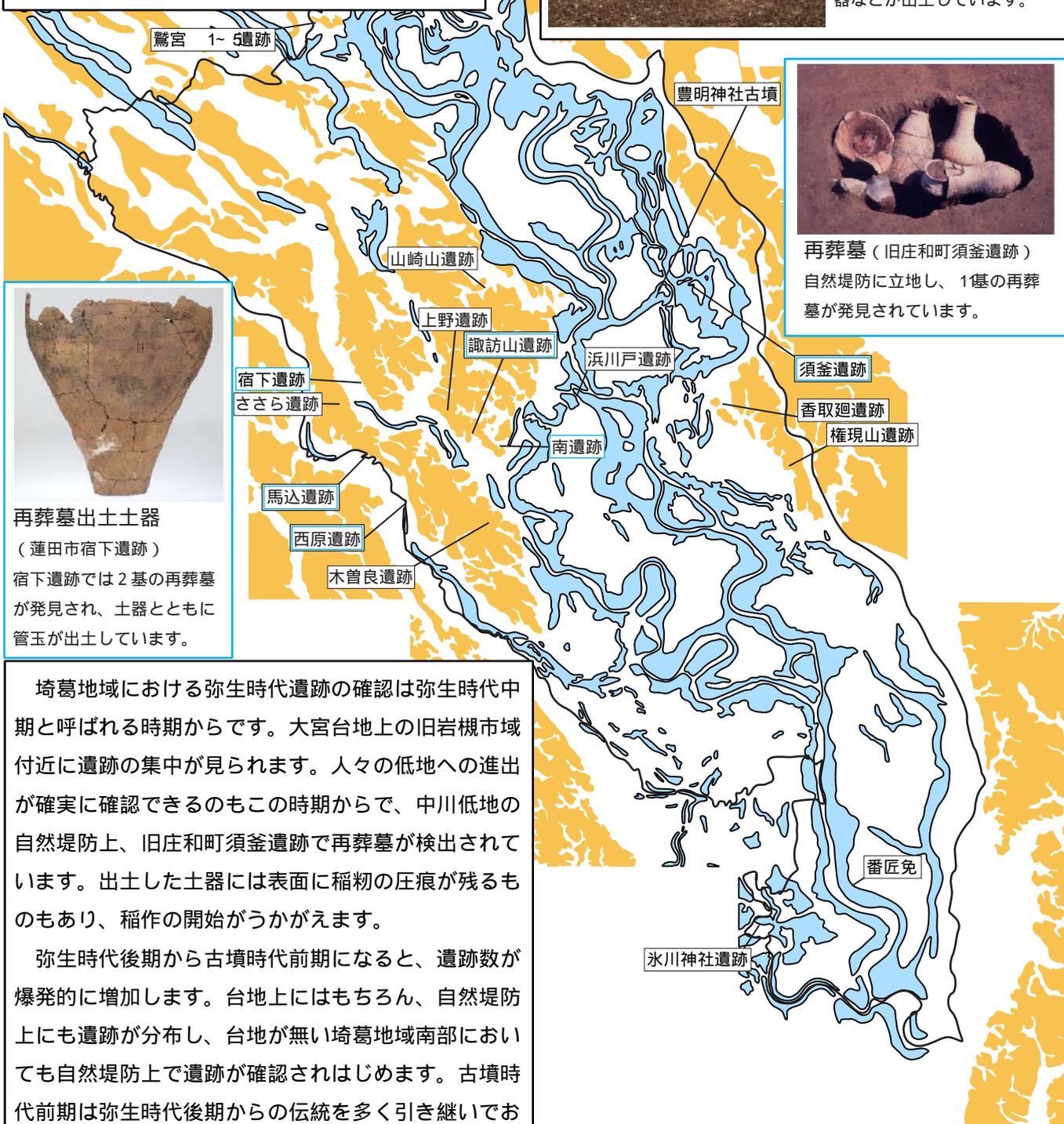
**豊明神社古墳**  
(杉戸町豊明神社古墳)  
自然堤防に立地する古墳の可能性のある高まりで、古墳時代前期の底部が穿孔された土器などが出土しています。



**再葬墓**(旧庄和町須釜遺跡)  
自然堤防に立地し、1基の再葬墓が発見されています。



**再葬墓出土土器**  
(蓮田市宿下遺跡)  
宿下遺跡では2基の再葬墓が発見され、土器とともに管玉が出土しています。



埼玉地域における弥生時代遺跡の確認は弥生時代中期と呼ばれる時期からです。大宮台地上の旧岩槻市域付近に遺跡の集中が見られます。人々の低地への進出が確実に確認できるのもこの時期からで、中川低地の自然堤防上、旧庄和町須釜遺跡で再葬墓が検出されています。出土した土器には表面に稲穂の圧痕が残るものもあり、稲作の開始がうかがえます。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、遺跡数が爆発的に増加します。台地上にはもちろん、自然堤防上にも遺跡が分布し、台地が無い埼玉地域南部においても自然堤防上で遺跡が確認されはじめます。古墳時代前期は弥生時代後期からの伝統を多く引き継いでおり、例えば方形周溝墓と呼ばれる弥生時代に特徴的な墓の形が古墳時代前期にも確認されます。またS字状口縁台付甕など他地域の土器が多く確認され、地域間の交流が盛んになっていたことがわかります。

**弥生時代中期の遺跡**  
弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡

## ●低地利用のはじまり —弥生時代～古墳時代前期—

埼玉地域の弥生時代から古墳時代前期の遺跡は大宮台地上、下総台地上、そして中川低地に立地します。弥生時代中期の台地上の遺跡は住居跡や二回にわたって埋葬する再葬墓、四角に溝をめぐらせる方形周溝墓といったお墓が検出されています。低地の自然堤防上に確実な遺跡の所在が確認できるのもこの時期で、中川低地の自然堤防上、旧庄和町須釜遺跡で再葬墓と考えられる土坑11基が検出されています。出土した土器の中には、表面に礫圧痕が残るものもあり、稲作の開始が窺えます。縄文時代後期から弥生時代中期中葉にかけて、「弥生の小海退」と呼ばれる海面の低下現象が全国的に認められています。同様の現象が中川低地でも起こっていたならば、急速な乾燥化が進んだ低地部分に人々が進出し、須釜遺跡のような遺跡を残したと考えられます。弥生時代中期後半になると、再び海水面は上昇し、これに伴い地下水位も上昇して、低地部分は湿潤化が進んだようです。しかしながら、人々はすでに低地での生活する技術を獲得しており、中川低地でも今後、遺跡が確認される可能性が高いでしょう。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は特に大宮台地上、旧岩槻市域で爆発的に遺跡数の増加が見られます。旧岩槻市木曾良遺跡では、卵形に展開する長軸66m、短軸56mの集落周囲を巡る環濠が検出され、環濠内に14軒、環濠外に8軒の住居跡が検出されています。火災の痕跡がある住居跡が多く検出されるのもこの時期の特徴のひとつです。この時期の墓の形態で特徴的なものは方形周溝墓で、古墳時代前期とはいえ、確実な古墳は確認されていません。出土する土器は、無文の壺形土器、ハケメ調整される台付甕形土器、高坏形土器などとともに、小型の丸底壺、小型の器台などがあります。他に流通品として、東海地方に起源をもついわゆるS字状の口縁を持つ「S字甕」と呼ばれる甕や、比企地方を中心に展開する吉ヶ谷系土器、さらには蓮田市ささら遺跡と蓮田市馬込八番遺跡からは西日本に起源をもつ手焙形土器などが出土しています。前時代に比べ広域的な人の動きがあったものと考えられます。



その他、宮代町山崎山遺跡では古墳時代前期の鍛冶工房と考えられる遺構が検出されています。また住居跡から土玉が集中出土する事例が多く、漁撈関係の生業に供されたものと考えられています。

古墳時代前期になると、すでに水面の上昇下降や気候に左右されることなく、人々は前時代に比べ安定した低地での生活を営んでいたようです。周辺地域においても低地での遺跡立地が顕著に認められるようになり、例えば埼玉県と東京都の境を流れる毛長川流域では、著名な東京都足立区伊興遺跡をはじめとして、多くの遺跡が確認されています。埼玉地域内でも同流域の八潮市氷川神社遺跡で五領式土器の散布が認められており、同遺跡以東でも毛長川が蛇行を繰り返しながら流下する八潮市域、三郷市域の自然堤防上に遺跡が存在する可能性があります。

\*図；鈴木直人1994「低地のムラ 上小岩遺跡」熊野正也編『東京低地の古代』崙書房より引用

# 川と低地利用の広がり

- 古墳時代中期・後期 -



**最大の古墳**  
 ( 菖蒲町天王山塚古墳 )  
 全長 110m、後円部径 55m、前方部幅 62mの埼玉地域最大の古墳です。



**系統の違う埴輪**  
 ( 春日部市塚内4号墳 )  
 内牧古墳群に含まれる本古墳からは武蔵型と下総型の埴輪が同一古墳から出土しています。

古墳時代中期は前期に比べ遺跡数が大幅に減少します。後期は増加し、奈良時代へと続いていきます。低地の遺跡は散在的ではあるものの前期に比べ後期には遺跡数が増えており、河川氾濫などの影響を受けつつも、低地利用が拡大したものと考えられます。今後の低地での調査によって、中期の遺跡も含めさらに遺跡数が増えることでしょう。

古墳は、中期から確認され、特に後期の群集墳と呼ばれる古墳群が多く見られます。古墳の石室石材には、秩父を産地とする緑泥片岩や群馬県榛名山の噴火によって生成された角閃石安山岩、「房州石」と呼ばれる房総半島南部を産地とする石が使用されており、河川を利用した舟運によって石材が運ばれたものと思われる。また、武蔵型埴輪、下総型埴輪と呼ばれる異系統の埴輪が同一古墳や古墳群から出土するといった特徴が挙げられます。



**古墳時代後期の土器**  
 ( 越谷市見田方遺跡 )  
 自然堤防上に立地する集落跡で、昭和4年に中川低地で初めてとなる発掘調査が行われました。

古墳時代中期の遺跡  
 古墳時代後期の遺跡  
 中期・後期の古墳 ( 群 )

## ●川と低地利用の広がり ―古墳時代中期・後期―

古墳時代中期の遺跡は埼玉地域内で11遺跡確認されており、集落跡は検出される住居跡が5から10軒程度の小規模なものです。もちろん低地の遺跡もあり、またこの時期の古墳は、蓮田市椿山古墳群の第1号墳から第4号墳、杉戸町目沼古墳群の第10号墳があります。

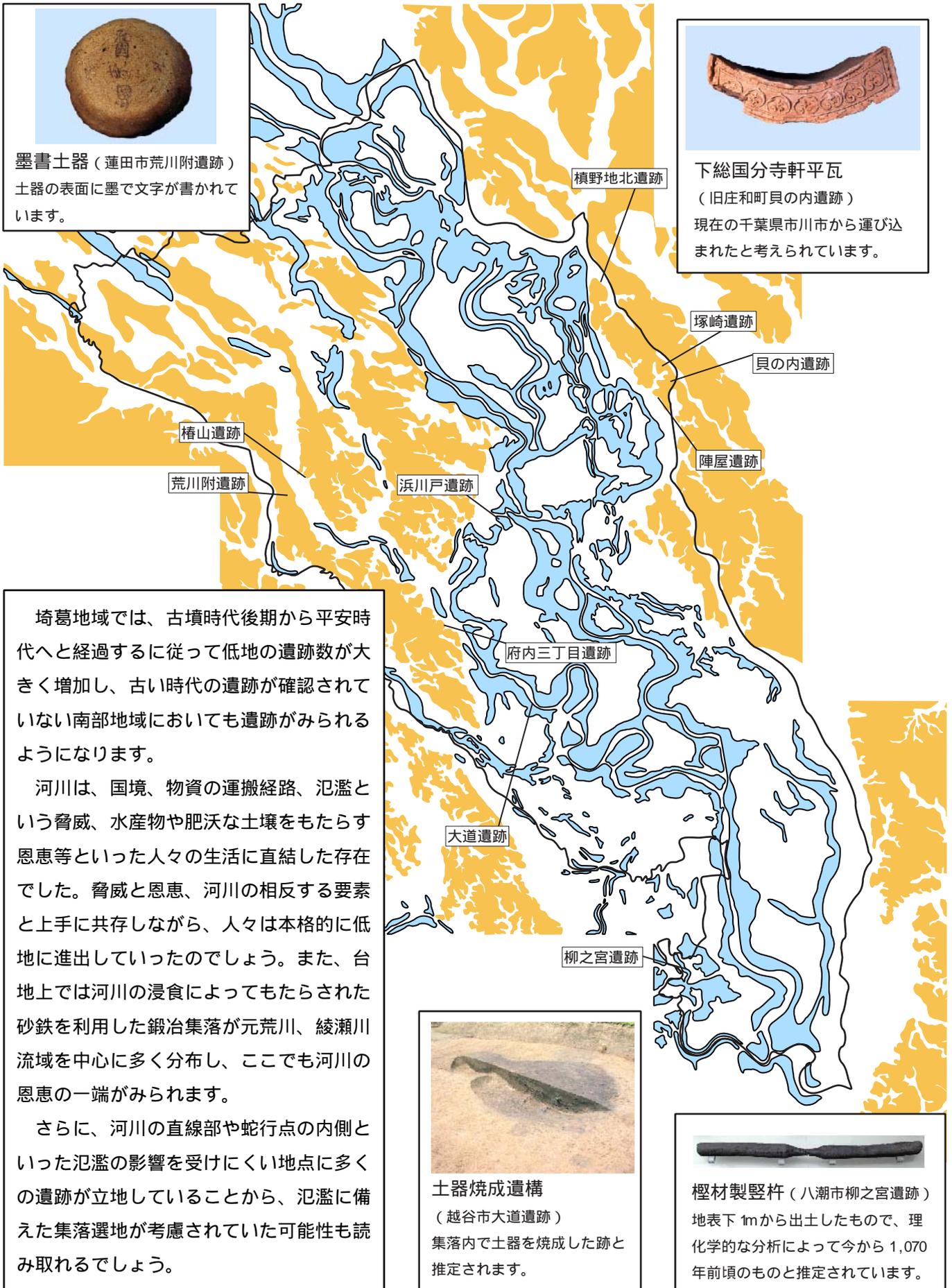
埼玉地域における古墳時代後期の遺跡数は250遺跡を数え、古墳時代中期の遺跡数と比較すると、およそ4倍も遺跡数が増加していることがわかります。古墳時代中期の遺跡数が少なかったことに加えて、自然堤防上に立地する遺跡数が大幅に増加したことが、その要因として考えられます。大宮台地では、やや散在的に分布している様相が窺えます。下総台地では、比較的まとまって遺跡が分布する傾向にあるようです。自然堤防上での遺跡の分布については散在的であると言わざるを得ません。このような分布からは、古墳時代後期の自然堤防の発達に極めて局所的であった、つまり河川が安定した流路を流下せず、乱流や変流を繰り返したことによって、大規模な自然堤防が形成されなかった状況が窺えます。

代表的な遺跡として蓮田市荒川附遺跡が挙げられます。現在までに古墳時代中期～平安時代に位置付けられる竪穴住居跡が207軒検出されており、うち古墳時代後期の竪穴住居跡は74軒検出され、大宮台地屈指の集落跡であるといえます。遺跡から出土した、土師器については7世紀前半以降、利根川流域の胎土を用いた製品が多く出土する傾向にあり、元荒川を用いた流通網が活発化したことが窺えます。須恵器についても、埼玉県大里郡寄居町に所在した末野窯跡群の製品が利根川から元荒川経由で、静岡県湖西市に所在した湖西窯跡群の製品が東京湾から元荒川を北進して本遺跡に搬入されています。

また、埼玉地域の多くの古墳は古墳時代後期のものです。これらの中で最も規模の大きい古墳は、菖蒲町栢間古墳群の天王山塚古墳であり、現在確認されている規模で全長110m、後円部径55m、前方部幅62mの規模を有し、2重周溝を持つ事も確認され、6世紀末の第四半期に位置付けられています。また埼玉地域では群集墳と呼ばれる古墳群が、春日部市塚内古墳群や杉戸町目沼古墳群をはじめとして、台地上に盛んに築造されています。

埼玉地域の古墳に特徴的なことは、石室に使用される石材のほとんどを他の地域から得ていることが挙げられます。石材には秩父を原産地とする緑泥片岩、6世紀中葉の群馬県榛名山の噴火によって生成された角閃石安山岩、「房州石」と呼ばれる千葉県富津市・鋸南町の鋸山を産地とする石などが検出されており、周辺各地から石室石材が河川交通を利用して運ばれてきたことが推測されます。特に房州石は非常に特徴的なもので、下流の葛飾区柴又八幡神社古墳や北区赤羽台古墳群、市川市法皇塚古墳でも確認されています。さらに上流にある埼玉古墳群の將軍山古墳でも利用されています。この他特徴的なものとして、「武蔵型埴輪」と「下総型埴輪」が挙げられます。「武蔵型埴輪」は武蔵地域の古墳に特徴的な埴輪であるのに対し、「下総型埴輪」は下総地域に特徴的なものです。武蔵地域の春日部市塚内4号墳では「武蔵型埴輪」「下総型埴輪」の双方が一つの古墳から、下総地域の杉戸町目沼古墳群では武蔵型埴輪が出土しています。このような現象は武蔵と下総の境に位置する埼玉地域ならではです。また、蓮田市、白岡町地域における「硬砂層」を利用した石室石材や住居跡の竈構築材への利用も特徴的なこととして挙げられます。関東ローム層直下の標高10.5m前後の台地縁辺部に40cm程の厚さを持つ硬砂層の存在と採掘跡が発見され、古墳の石室に使用する石材や竈袖の補強材として「硬砂層」と呼ばれる岩石に近い地層を意図的に利用したことが判明しています。

# 川との共存、そして活用 - 奈良・平安時代 -



墨書土器（蓮田市荒川附遺跡）  
土器の表面に墨で文字が書かれています。



下総国分寺軒平瓦  
（旧庄和町貝の内遺跡）  
現在の千葉縣市川市から運び込まれたと考えられています。

埼玉地域では、古墳時代後期から平安時代へと経過するに従って低地の遺跡数が大きく増加し、古い時代の遺跡が確認されていない南部地域においても遺跡がみられるようになります。

河川は、国境、物資の運搬経路、氾濫という脅威、水産物や肥沃な土壌をもたらす恩恵等といった人々の生活に直結した存在でした。脅威と恩恵、河川の相反する要素と上手に共存しながら、人々は本格的に低地に進出していったのでしょうか。また、台地上では河川の浸食によってもたらされた砂鉄を利用した鍛冶集落が元荒川、綾瀬川流域を中心に多く分布し、ここでも河川の恩恵の一端がみられます。

さらに、河川の直線部や蛇行点の内側といった氾濫の影響を受けにくい地点に多くの遺跡が立地していることから、氾濫に備えた集落選地が考慮されていた可能性も読み取れるでしょう。



土器焼成遺構  
（越谷市大道遺跡）  
集落内で土器を焼成した跡と推定されます。



榿材製豎杵（八潮市柳之宮遺跡）  
地表下 1m から出土したもので、理化学的な分析によって今から 1,070 年前頃のものとして推定されています。

## ●川との共存、そして活用 - 奈良・平安時代 -

### (1) 奈良・平安時代とは？

奈良時代とは、710年に元明天皇がそれまでの都であった藤原京から平城京に都を遷して、その後794年に桓武天皇によって平安京に都が遷されるまでの84年間を指します。現在の奈良県に都が置かれたことから奈良時代と呼ばれています。一方、平安時代とは、794年から源頼朝が全国統治の基礎となる守護・地頭の設置権を獲得した1185年までの391年間を指します。現在の京都府に平安京と呼ばれる都が置かれ政治の中心であったことから平安時代と呼ばれます。

### (2) 埼玉地域における奈良・平安時代の遺跡

埼玉地域では、奈良時代の遺跡数は155遺跡を数え、その立地は台地上に114遺跡（大宮台地96遺跡、下総台地18遺跡）、自然堤防上に41遺跡が立地しています。古墳時代後期と比較すると、遺跡数は減少していますが、自然堤防上の遺跡数が大きく増加（27→41遺跡）していることがわかります。これら155遺跡の中で実際に発掘調査が実施され、該期の遺構が検出されたのは19遺跡を数えます。台地上では、幸手市榎野地北遺跡、蓮田市荒川附遺跡、旧庄和町塚崎遺跡等が、自然堤防上では春日部市浜川戸遺跡・小湊山下遺跡等があります。

榎野地北遺跡で出土した土器を観察しますと、須恵器は静岡県・茨城県・栃木県産が、また土師器は茨城県産のものが使用されていました。

荒川附遺跡では、須恵器坏底部の中央に「東」、上下に「石國」、左右に「石」といった複数の文字が記された事例をはじめとして、多量の墨書土器が出土しています。

浜川戸遺跡では、一般民衆よりも相対的に優位な階層が採用した墓制であると考えられている火葬の跡が確認されています。

一方、平安時代の遺跡数は225遺跡を数え、その立地は台地上に167遺跡（大宮台地128遺跡、下総台地39遺跡）、自然堤防上に58遺跡が立地しています。奈良時代と比較しますと、台地上、自然堤防上の遺跡共に遺跡数が増加していることがわかります。これら225遺跡の中で実際に発掘調査が実施され、該期の遺構が検出されたのは34遺跡を数えます。台地上では、蓮田市椿山遺跡、旧岩槻市府内三丁目遺跡、旧庄和町貝の内遺跡・陣屋遺跡等が、自然堤防上では杉戸町上椿遺跡、春日部市八木崎遺跡、越谷市大道遺跡等があります。

椿山遺跡では、鉄生産に関わる住居跡や大鍛冶、小鍛冶の遺構が検出され、その廃棄物である鉄滓も多量に出土しており、鉄生産を契機として集落が大きく展開していったことが窺えます。なお、古代日本で製造された銅銭、所謂「皇朝十二銭」である承和昌寶が出土し、県内でも珍しい資料となっています。

貝の内遺跡で検出された1軒の住居跡からは、カマドを構築する際に粘土が崩れないように芯材として、現在の市川市にあった下総国分寺の創建期に使用されていた瓦と同範の軒平瓦が出土しています。

大道遺跡では、土器焼成遺構と推定される土坑が検出されており、集落内で土器を生産していた可能性が指摘されています。

なお、該期の遺構は検出されていないものの、八潮市柳之宮遺跡では旧綾瀬川と推定されている地点から堅杵が出土しました。地表下1mの出土であり、このことから、低地では遺跡が形成されても、その後の河川氾濫等によって、厚く土砂が堆積する様相が窺えます。現在のところ埼玉地域南部では比較的遺跡が少ないとされていますが、地表下の深いところに遺跡が埋没している可能性もあるでしょう。

### (3) 奈良・平安時代の流通について

これまで遺跡の分布についてみてきましたが、ここでは遺跡から出土する遺物、特に「須恵器」と呼ばれる土器についてみていきます。須恵器は5世紀前葉に朝鮮半島から新たに伝来した焼物で、専用の窯で1,100℃以上の高温で焼成され、器面の色調が青灰色を呈す硬質な土器です。なお、埼玉地域では現在までに須恵器を焼成した窯跡は発見されておらず、外部から供給された土器であるとも言えるでしょう。

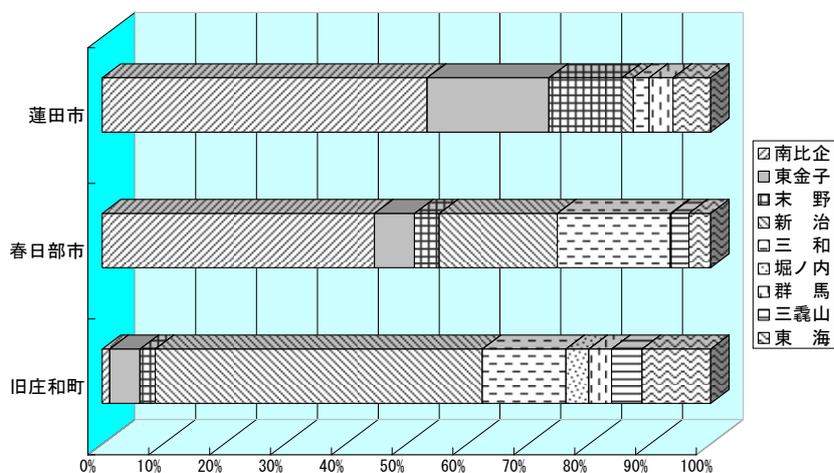
埼玉地域はかつて武蔵国と下総国との2国に跨って立地していたと述べました。ここでは、須恵器の産地組成、特に東側（茨城県・千葉県）からと、西側（埼玉県）からの供給の流れについて分析することによって、その特徴を検証してみることにしましょう。

蓮田市は埼玉地域の西部に位置し、古代には武蔵国埼玉郡に所属していました。市内の遺跡から出土した須恵器の産地組成をみてみますと、南比企窯跡群・東金子窯跡群・末野窯跡群といった埼玉県内に所在する窯跡群からの供給が全体の85.4%を占めており、圧倒的に西側からの供給が多いことがわかります。

春日部市は埼玉地域の中央部に位置し、古代には概ね現在の古利根川を境に西岸が武蔵国埼玉郡に、東岸が下総国葛飾郡に所属していたと推定されていることから、ちょうど両国の境界域に位置していました。それを裏付けるかのように、埼玉県内に所在した窯跡群からの供給が56.4%、新治窯跡群や三和窯跡群といった茨城県に所在した窯跡群からの供給が36.9%を示しており、蓮田市の事例と比較しますと、東側からの供給が増加してきたことがわかります。

旧庄和町は埼玉地域の東部に位置し、古代には下総国葛飾郡に所属していました。旧町内の遺跡から出土した須恵器の産地組成をみてみますと、茨城県内に所在する窯跡群からの供給が71.3%を占めており、圧倒的に東側からの供給が多いことがわかります。

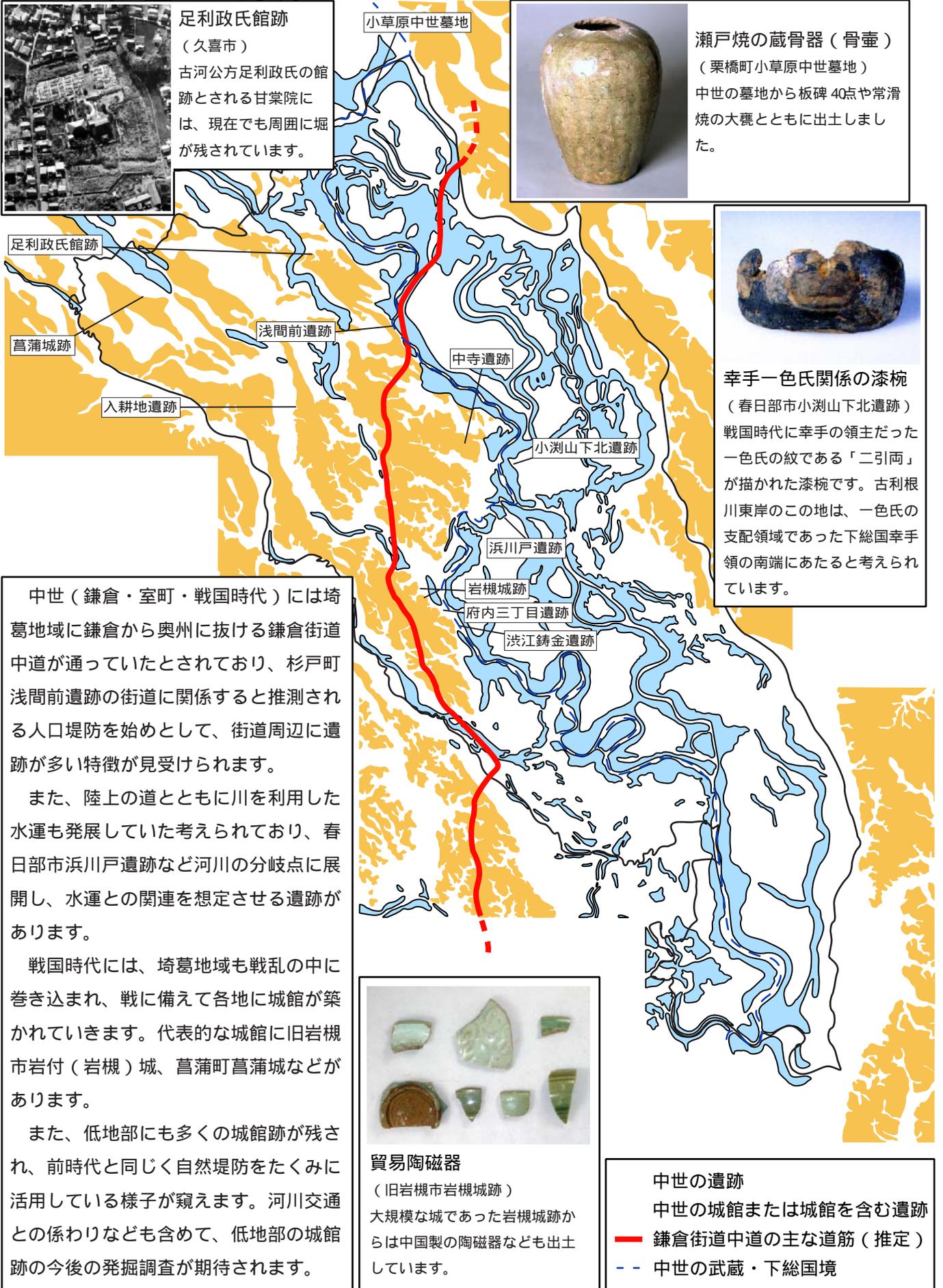
以上のように、埼玉地域に所属する3市町について、出土須恵器の産地組成をみてきましたが、西側に位置する地域、すなわち古代において武蔵国に所属していた蓮田市では武蔵国産の須恵器が圧倒量を占め、東側に位置する地域、すなわち古代において下総国に所属していた旧庄和町では下総国や常陸国産の須恵器が優勢であり、ちょうど中間地点に位置する春日部市では東側からと西側からの供給量が概ね均衡する状況にあることが確認できました。このことは古代において、埼玉地域が武蔵国と下総国とにまたがって位置していた特徴を如実に示していると考えられます。そして、これら土器の流通に関して、今回のテーマである河川が重要な流通経路として活用されていたことは想像に難くないでしょう。



埼玉地域3市町における須恵器の産地組成



# 川との発展 - 鎌倉～戦国時代 -



**足利政氏館跡**  
(久喜市)  
古河公方足利政氏の館跡とされる甘棠院には、現在でも周囲に堀が残されています。



**瀬戸焼の蔵骨器(骨壺)**  
(栗橋町小草原中世墓地)  
中世の墓地から板碑40点や常滑焼の大甕とともに出土しました。

足利政氏館跡  
菅蒲城跡  
入耕地遺跡

浅間前遺跡

中寺遺跡

小淵山下北遺跡

浜川戸遺跡

岩槻城跡

府内三丁目遺跡

洪江鍔金遺跡

中世(鎌倉・室町・戦国時代)には埼玉地域に鎌倉から奥州に抜ける鎌倉街道中道が通っていたとされており、杉戸町浅間前遺跡の街道に関係すると推測される人口堤防を始めとして、街道周辺に遺跡が多い特徴が見受けられます。

また、陸上の道とともに川を利用した水運も発展していた考えられており、春日部市浜川戸遺跡など河川の分岐点に展開し、水運との関連を想定させる遺跡があります。

戦国時代には、埼玉地域も戦乱の中に巻き込まれ、戦に備えて各地に城館が築かれていきます。代表的な城館に旧岩槻市岩付(岩槻)城、菅蒲町菅蒲城などがあります。

また、低地部にも多くの城館跡が残され、前時代と同じく自然堤防をたくみに活用している様子が窺えます。河川交通との係わりなども含めて、低地部の城館跡の今後の発掘調査が期待されます。



**幸手一色氏関係の漆椀**  
(春日部市小淵山下北遺跡)  
戦国時代に幸手の領主だった一色氏の紋である「二引両」が描かれた漆椀です。古利根川東岸のこの地は、一色氏の支配領域であった下総国幸手領の南端にあたる考えられています。



**貿易陶磁器**  
(旧岩槻市岩槻城跡)  
大規模な城であった岩槻城跡からは中国製の陶磁器なども出土しています。

中世の遺跡  
中世の城館または城館を含む遺跡  
— 鎌倉街道中道の主な道筋(推定)  
- - 中世の武蔵・下総国境

## ●川との発展 ー鎌倉～戦国時代ー

### (1) 埼玉地域の中世遺跡と城館跡

埼玉地域には中世（鎌倉～戦国時代）の遺跡が 195 遺跡確認されており、台地上に 148 遺跡、自然堤防上に 47 遺跡が立地しています。鎌倉時代の主な遺跡として、白岡町神山遺跡・赤砂利遺跡、杉戸町浅間前遺跡、春日部市浜川戸遺跡などがあります。浅間前遺跡では古利根川沿いに人工的な盛土が確認されており、『吾妻鏡』に記載のある人工の堤防や鎌倉街道の一部などと考えられています。室町時代から戦国時代の遺跡としては、栗橋町小草原中世墓地、白岡町入耕地遺跡、宮代町東条原宿屋敷遺跡・中寺遺跡、春日部市坊荒句遺跡・小淵山下北遺跡などがあります。

このほかに城館跡もあります。埼玉地域の城館には、主に鎌倉時代の館と戦国時代の大規模な城や戦国時代末の小規模な館などがあります。

鎌倉時代の城館跡として、久喜市の清久館・太田氏館、白岡町の丸山城・白岡氏館・南鬼窪氏館、春日部市の春日部氏館、旧岩槻市の柏崎氏館・金重氏館・渋江氏館・箕勾氏館、旧庄和町の下河辺行平館、吉川市の吉川氏館、越谷市の大相模次郎館、八潮市の八条五郎光行館、三郷市の風早太郎館などがあります。これらの城館の多くは、『吾妻鏡』等でその名前が確認できる武士の城館とされています。ただし、春日部氏館（浜川戸遺跡）で鎌倉時代の堀や建物跡等が検出されている以外では、この時期の城館跡として発掘調査の行われているものはありません。中には伝承の域を出ない城館跡もあるようです。

戦国時代になると、埼玉地域も戦乱に巻き込まれ、多くの城館が築かれました。大規模な城館として、旧岩槻市岩付城、菖蒲町菖蒲城、久喜市足利政氏館、幸手市幸手城などがあります。

その中でも大規模な城館が岩付城です。岩付城は扇谷上杉氏方の太田道灌により築城されたと長年考えられてきましたが、近年では古河公方方の成田氏による築城説も出されています。やがて太田氏が岩付城を攻略し、城主に就きました。その後、太田氏は後北条氏方となりますが、越後上杉氏方に付くなどの姿勢から後北条氏と対立を深め、岩付城は後北条氏の直接支配する城となります。後北条氏が直接支配していた時期に、城だけでなく城下町全てを堀や土塁で囲む、大構が構築されました。天正 18（1590）年の豊臣秀吉の小田原攻めの際、岩付城も攻められ落城しました。その後、江戸時代には岩槻藩の藩庁となり、明治時代になって廃城となりました。岩槻城跡では、土塁や堀が検出され、御茶屋曲輪では盛土の層から少なくとも 5 期に分かれて変遷することが判明しています。遺物として、国産陶器の他、後北条系とされる手づくねかわらけや舶来陶磁器などが出土しています。

菖蒲城は、古河公方方の金田氏によって康正 2（1456）年に築城されたと伝えられる城です。菖蒲城跡では、かわらけや青磁、白磁などの遺物が出土していますが、城の縄張りが判明するような遺構は確認されていません。

埼玉地域北部では足利政氏館、幸手一色氏による幸手城や天神島城等、古河公方方と伝えられる城館が数多く残されています。この他、蓮田市関戸足利遺跡・江ヶ崎城、白岡町入耕地遺跡・南鬼窪館跡、宮代町中寺遺跡・伝承旗本服部氏屋敷跡遺跡、旧岩槻市府内三丁目遺跡・渋江鑄金遺跡などで堀など城館に関する遺構が見つかっています。



大規模な堀と土塁（旧岩槻市府内三丁目遺跡）

# 石造物からみた低地の利用

- 鎌倉～戦国時代 -



最古の板碑  
(旧岩槻市)  
埼玉地域最古  
となる寛元元  
(1243)年の  
板碑です。



南朝の年号の板碑  
(幸手市内)  
南北朝時代の南朝の年号が  
刻まれた板碑です。幸手市  
内に残されていたもので、  
古利根川の東側に位置し、  
当天下総国であったこの付  
近に南朝の勢力があったと  
考えられます。



最大の板碑  
(蓮田市馬込)  
高さが約4mもあり、  
埼玉地域のみならず  
県内でも屈指の大型  
板碑です。通称「寅  
子石」と呼ばれてい  
ます。



廿一仏板碑  
(越谷市増森)  
廿一仏板碑は主  
に庚申信仰の板  
碑として埼玉地  
域南部や隣接都  
県で集中的に造  
立されました。

埼玉地域では現在までに遺跡の確認されていない市町がありますが、これらの市町でも城館跡と共に石造物が残されており、中世(鎌倉～戦国時代)にも人々の生活があったことが分かります。石造物の中でも特に多いのが、石製の卒塔婆である板碑です。本地域では、一番古い寛元元(1243)年の板碑を始めとして、年号の確認できる板碑が1,387基残されています。

戦国時代になると他地域の板碑の造立数は減りますが、本地域南部やその隣接地域では廿一仏板碑など民間信仰に基づくと考えられる板碑の造立が盛んになり、逆に増加することが本地域の特徴と言えます。

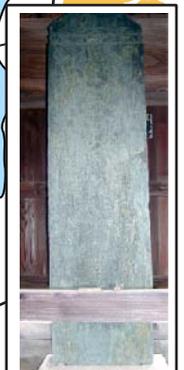
台地上のみならず、低地部にも数多くの板碑が確認されており、一部は移動も考えられますが後背湿地にも存在し、さらなる低地への進出、利用を想像させます。



南无仏塔(吉川市木売)  
中国(元国)からの使者として来日した臨濟宗の僧侶で、鎌倉の建長寺や京の南禅寺などの住職を務めた一山一寧の書いた「南无(無)仏」の文字を板碑にしたものです。



弘安銘板碑  
(八潮市八條)  
八條殿社の神体として代々祀られてきた板碑です。



十三仏板碑  
(三郷市上口)  
13の仏を表した  
梵字を刻んだ板  
碑です。

## (2) 埼玉地域の板碑

板碑とは、板石塔婆などとも呼ぶ石製の供養塔（卒塔婆）です。全国各地に残されていますが、埼玉県を中心に分布している板碑は、長瀨町や小川町などで採れる緑泥片岩（緑泥石片岩）という石材を用いており、石材の性質から厚さがない板状を呈し、上部は山形に尖り、その下に2本の横線が入り、中央に仏を表す大きな梵字が彫られています。このような緑泥片岩を用いた板碑を武蔵型板碑と呼んでいます。最古の板碑は熊谷市（旧江南町）にある嘉禄3（1227）年銘で、同時期の板碑は最古の板碑のある大里郡とその周辺に集中しています。13世紀後半になると、埼玉県内を中心に関東各地に分布するようになります。

板碑の発生地域が荒川流域の大里郡であることや、採石地から離れているにも拘らず、埼玉地域の蓮田市に県内2番目の大きさの板碑となる通称「眞子石」が残されていることは、採石地とそれらの地域を結ぶ荒川（元荒川）が板碑の造立に大きな役割を果たしたと考えられるでしょう。

板碑の特徴として、ほとんどの板碑に年号が彫られていることが上げられます。そのため造立した時期が分かり、そこから当時の人々の活動について分かるのはもちろんですが、そのほかに年号から政治的な動きを知ることができます。

南北に朝廷が分裂していた時期の板碑に彫られた年号を調べると、南朝と北朝それぞれの年号を用いた板碑などを見つけることができます。南朝の年号銘は、幸手市に3基、蓮田市に1基、春日部市に3基、越谷市に1基が残されており、南朝側の勢力が存在したと考えられています。特に、春日部を本拠としていた春日部氏は南朝側に付いたとされており、春日部市内に3基もの南朝銘板碑が残っていることは、そのことを裏付けているのではないかと思います。

板碑の造立数は14世紀後半～15世紀をピークに徐々に減り始め、江戸時代に入ると全く造立なくなってしまいます。

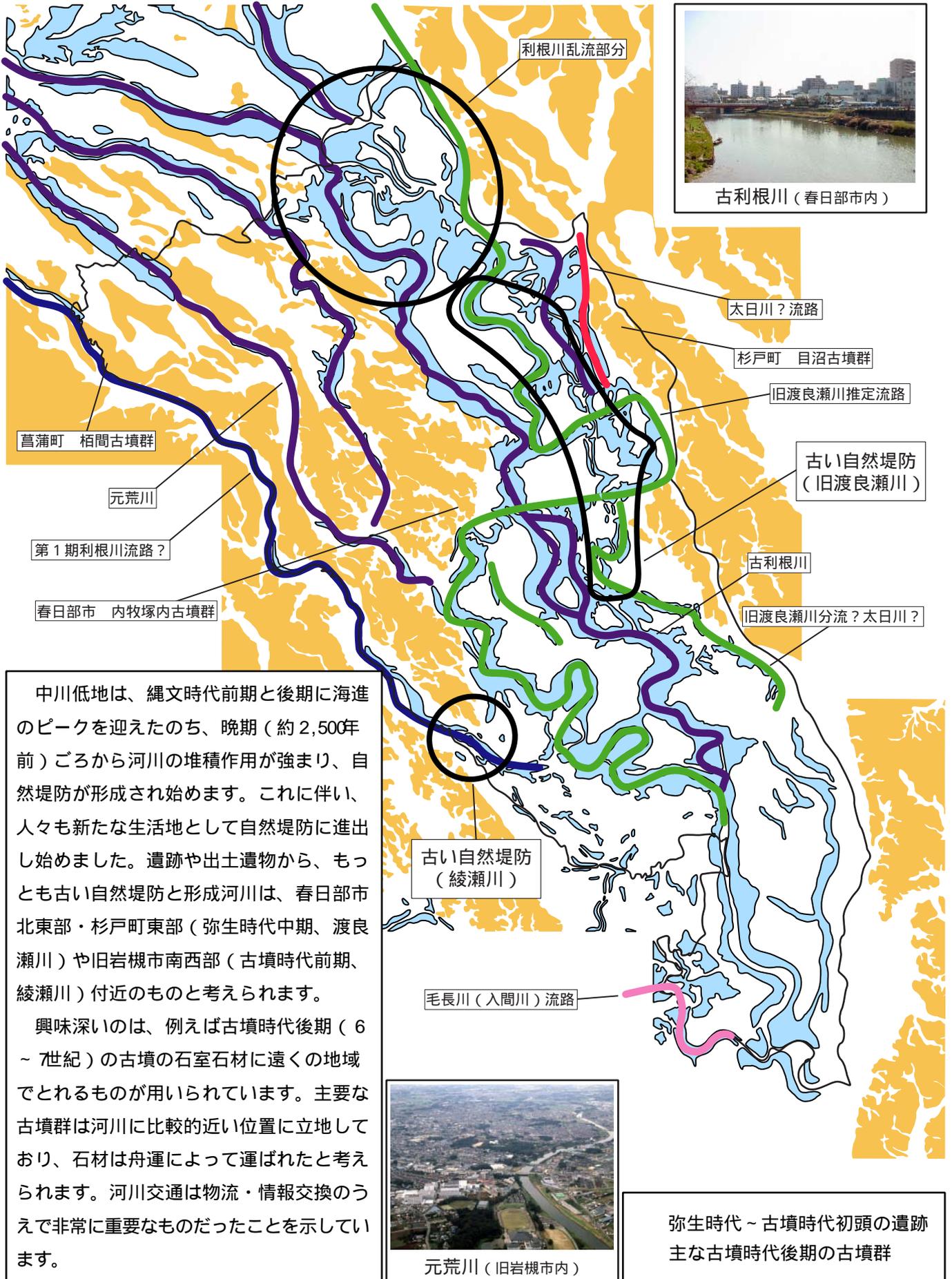
中世に入ってから造立が始まり、中世の終わりとともに姿を消してしまう板碑は、まさに関東の中世を象徴する存在と言えます。



武蔵型板碑の分布領域

『小川町の歴史 資料編3 古代・中世II』より引用・改変

# 遺跡からみた河川のうつりかわり



中川低地は、縄文時代前期と後期に海進のピークを迎えたのち、晩期（約2,500年前）ごろから河川の堆積作用が強まり、自然堤防が形成され始めます。これに伴い、人々も新たな生活地として自然堤防に進出し始めました。遺跡や出土遺物から、もっとも古い自然堤防と形成河川は、春日部市北東部・杉戸町東部（弥生時代中期、渡良瀬川）や旧岩槻市南西部（古墳時代前期、綾瀬川）付近のものと考えられます。

興味深いのは、例えば古墳時代後期（6～7世紀）の古墳の石室石材に遠くの地域でとれるものが用いられています。主要な古墳群は河川に比較的近い位置に立地しており、石材は舟運によって運ばれたと考えられます。河川交通は物流・情報交換のうえで非常に重要なものだったことを示しています。

弥生時代～古墳時代初頭の遺跡  
主な古墳時代後期の古墳群

## ●遺跡からみた河川のうつり変わり ―まとめにかえて―

中川低地のなりたちを概観すると、まず旧石器時代（約2万年前）～縄文時代早期初め（約8,000年前）までは、高さ数十mの切り立った峽谷<sup>きょうこく</sup>でした。その後縄文早期後半ごろから急激に温暖化が進み、縄文前期中ごろ（約5,500年前）には海岸線が栃木県藤岡市付近まで達します（奥東京湾）。海は縄文中期（5,000～4,000年前）にはいったん埼玉地域の台地部から離れますが、後期（4,000～3,000年前）になると再び前進します。とくに下総台地側で大規模な貝塚が形成されることから、海水域は中川低地本筋域に偏っていたようですが、貝塚の貝種がヤマトシジミ主体のものがほとんどであることから、前期と異なり波打ち際というよりは川の河口域のような環境だったと思われます。

縄文晩期（3,000年前～）、海はついに遠ざかり、河川による土砂堆積作用によって「中川峡谷」は「中川低地」へと変貌していきます。これ以降、河川は氾濫・蛇行を繰り返し、両岸に「自然堤防」を形成していきました。

人々がこの自然堤防を新たな生活地として選択したことが、弥生時代以降の遺跡の分布から把握されます。またそれは同時に、その自然堤防が形成された時期を示していることから、過去の河川の流路を推定することができます。

中川低地で現在も残るもっとも古い自然堤防は弥生時代以降のもので、2つの地域で認められます。まず一つは中川低地本筋の、幸手市・杉戸町から旧庄和町にかけての一带です（パネル図中央右）。これらの自然堤防上には幸手市No.22遺跡、杉戸町大堀南遺跡、旧庄和町須釜遺跡など、弥生中～後期（約2,000～1,800年前）の遺跡が展開し、上流の渡良瀬川からつながる流路であると推測されます。この古い自然堤防（流路）は春日部市中央部でさらに2方向に展開した可能性があり（パネル図中央）、一方は春日部市沼廻<sup>ぬままわり</sup>遺跡（弥生時代）が存在する南ルート、もう一方は春日部市浜川戸遺跡が控える古隅田川流路（現在と逆の流れ）方向の西ルートが想定されます。

もう一つの古期自然堤防は綾瀬川筋（パネル図中央左下）で、旧岩槻市南部<sup>かきあげいかり</sup>の釣上碇遺跡をはじめとする弥生時代から古墳時代前期（約1,700年前）にかけての遺跡が点在します。この筋の下流域の自然堤防は残丘状の景観をとどめているにすぎませんが、越谷市見田方遺跡（古墳後期）などはこの残丘状自然堤防の一つに展開しています。綾瀬川筋の自然堤防は現在の川の流量と釣り合わない規模であることから、かつて利根川本流筋が同川筋を流下したと考えるのが妥当でしょう。

古墳時代後期（約1,400年前）には、自然堤防が安定してきたことがうかがえます。その例として、古墳時代後期から中世まで継続する春日部市小湊山下北遺跡の存在が挙げられます。地質学的にも利根川本流筋がこの時代に現古利根川流域に移ったとされます。

河川は、情報・物流の重要なルートでもありました。古墳の石室石材として、菖蒲町打出塚古墳・杉戸町目沼3号墳では秩父原産の緑泥片岩<sup>りよくていへんがん</sup>が、春日部市内牧古墳群では群馬縣榛名山域産<sup>かきせんせきあんざんがん</sup>の角閃石安山岩が、杉戸町目沼古墳群では緑泥片岩や角閃石安山岩のほか、千葉県鋸山<sup>のこぎりやま</sup>産の「房州石」<sup>ぼうしゅういし</sup>も使用されています。房州石は中川低地下流の東京都葛飾区や北区の古墳でも用いられています。同じように生産地の特徴を表す埴輪<sup>はにわ</sup>では、武蔵地域の春日部市内牧古墳群4号墳で「下総型埴輪」が、下総地域の杉戸町目沼古墳群では「武蔵型埴輪」が出土しています。埼玉地域が文化の交差点であることを示しているとともに、河川を通じた情報・物流ネットワークの発達を読みとれます。

古代（奈良・平安時代）、そして中世に至っても川は人々の暮らしを支え、影響を与えています。地理的には、埼玉地域を分け隔てる武蔵・下総旧国境が、河川流路をもとに定められたのはいうまでもありま

せん。産業面では、元荒川流域で奈良～平安期の製鉄関連の遺構・遺物が確認される遺跡として蓮田市椿山遺跡（＝小鍛冶跡。鉄を製品に整えた跡）、白岡町山遺跡（＝炭焼窯…製鉄炉用の燃料生産）などがあり、周辺遺跡では鉄滓（製鉄過程で生じる不純物）が散見されます。河畔の良質な砂鉄と燃料向きの薪炭林の存在そして物流ネットワークが、製鉄業を発展させたのでしょう。

中世では自然堤防と古道・集落の関係がうかがえます。埼玉南部では自然堤防上を江戸時代以前の古道が通っていたり、元荒川筋の越谷市南荻島で15世紀代の板碑が集中していたりするなど、石造物の分布を追跡することで旧河川流路や自然堤防が明らかにできます。また杉戸町下高野の古利根川沿い堤防は、奈良時代以降の人工堤防の可能性があり、川（水）と人との闘いがすでに始まっていたことを物語っています。

「埼玉の遺跡」を通してわかることは、「人々が古くから海・川・水の恩恵を受け、巧みに利用し、時に苦しめられてきた」という端的な事実です。そこから、現代に生きる私たちは何を学び取るのでしょうか。そして、私たちは今も水・川との関わりでさまざまな「遺跡」を残しつつあります。後世の人々ほどのような評価を下すのか、聞いてみたいものです。



伝葛蒲町栢間字堰下出土 人物埴輪

第4回埼玉地区文化財担当者会巡回展  
「埼玉の遺跡 水とともに」

発行日：平成20年3月8日

編集・発行：埼玉地区文化財担当者会

# ◆ 宮代町会場展示品リスト

資料番号	資料	所蔵者等
1	黒浜貝塚群天神前遺跡出土土器	蓮田市教育委員会
2	須釜遺跡第2号再葬墓出土弥生土器	春日部市教育委員会
3	本郷貝塚土坑出土堀之内式土器	松伏町教育委員会
4	タタラ山遺跡出土花積下層式土器	白岡町教育委員会
5	タタラ山遺跡出土アクセサリー	白岡町教育委員会
6	前田遺跡出土縄文時代晩期土器	白岡町教育委員会
7	入耕地遺跡出土釣手土器	白岡町教育委員会
8	小草原中世墓地出土瓶子	栗橋町教育委員会
9	坊荒匂北遺跡出土撚糸文土器	春日部市教育委員会
10	坊荒匂北遺跡出土沈線文土器	春日部市教育委員会
11	小淵山下北遺跡出土漆器	春日部市教育委員会
12	貝の内遺跡出土下総国分寺瓦	春日部市教育委員会
13	目沼古墳出土円筒埴輪	杉戸町教育委員会
14	目沼古墳出土朝顔形埴輪	杉戸町教育委員会
15	目沼古墳出土人物埴輪	杉戸町教育委員会
16	目沼古墳出土白玉一括	杉戸町教育委員会
17	目沼古墳出土須恵器	杉戸町教育委員会
18	豊明神社古墳出土底部穿孔土器	杉戸町教育委員会
19	浅間前遺跡出土板碑(長祿3年)	杉戸町教育委員会
20	前原遺跡出土ナイフ形石器	宮代町教育委員会
21	金原遺跡出土ナイフ形石器	宮代町教育委員会
22	逆井遺跡出土細石刃	宮代町教育委員会
23	逆井遺跡出土細石刃核	宮代町教育委員会
24	金原遺跡出土尖頭器	宮代町教育委員会
25	山崎遺跡出土尖頭器	宮代町教育委員会
26	前原遺跡出土微隆起線文土器	宮代町教育委員会
27	前原遺跡出土表裏縄文土器	宮代町教育委員会
28	前原遺跡出土撚糸文土器	宮代町教育委員会
29	逆井遺跡出土沈線文土器	宮代町教育委員会
30	逆井遺跡出土押型文土器	宮代町教育委員会
31	逆井遺跡出土条痕文土器	宮代町教育委員会
32	地蔵院遺跡出土条痕文土器	宮代町教育委員会
33	道仏北遺跡出土条痕文土器	宮代町教育委員会
34	山崎遺跡出土条痕文土器	宮代町教育委員会
35	逆井遺跡・金原遺跡出土耳飾	宮代町教育委員会
36	道仏北遺跡出土花積下層式土器	宮代町教育委員会
37	道仏北遺跡出土黒浜式土器	宮代町教育委員会
38	道仏北遺跡出土諸磯式土器	宮代町教育委員会

資料番号	資料	所蔵者等
39	前原遺跡出土諸磯式土器	宮代町教育委員会
40	金原遺跡出土阿玉台式土器	宮代町教育委員会
41	地蔵院遺跡出土加曾利E式土器	宮代町教育委員会
42	金原遺跡出土加曾利E式土器	宮代町教育委員会
43	地蔵院遺跡出土耳飾	宮代町教育委員会
44	金原遺跡出土称名寺式土器	宮代町教育委員会
45	山崎山遺跡出土称名寺式土器	宮代町教育委員会
46	金原遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
47	地蔵院遺跡出土称名寺式土器	宮代町教育委員会
48	藤曾根遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
49	山崎遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
50	地蔵院遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
51	道仏北遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
52	道仏北遺跡出土加曾利B式土器	宮代町教育委員会
53	山崎南遺跡加曾利B式土器	宮代町教育委員会
54	山崎山遺跡加曾利B式土器	宮代町教育委員会
55	地蔵院遺跡曾利式土器	宮代町教育委員会
56	山崎遺跡出土土偶	宮代町教育委員会
57	宿源太山遺跡出土土師器	宮代町教育委員会
58	山崎山遺跡出土土師器	宮代町教育委員会
59	山崎山遺跡出土白玉・管玉	宮代町教育委員会
60	道仏北遺跡出土土師器	宮代町教育委員会
61	道仏北遺跡出土勾玉	宮代町教育委員会
62	道仏遺跡出土土師器	宮代町教育委員会
63	山崎遺跡出土土師器	宮代町教育委員会
64	道仏遺跡出土石製模造品	宮代町教育委員会
65	前原遺跡出土称名寺式土器	宮代町教育委員会
66	中寺遺跡出土遺物	宮代町教育委員会
67	伝承服部氏屋敷跡出土遺物	宮代町教育委員会
68	東条原宿屋敷遺跡出土土鍋	宮代町教育委員会
69	地蔵院遺跡出土カワラケ	宮代町教育委員会
70	金原遺跡出土条痕文土器	宮代町教育委員会
71	山崎山遺跡出土堀之内式土器	宮代町教育委員会
72	道仏遺跡出土須恵器	宮代町教育委員会
73	地蔵院遺跡出土土鍋	宮代町教育委員会
74	伝承服部氏屋敷跡出土播鉢	宮代町教育委員会

発行 宮代町郷土資料館  
 埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289番地  
 TEL 0480-34-8882  
 FAX 0480-32-5601  
<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>